特42
444

仲光

仲光と申す者は、菅原の満仲よりは仕へ申す者にて、扨も所々の義女
所前なりしき中ゐまするのに
せまりれは家より学ぶ文をば忘よい
まだ若くして弓矢武勇を所をて
なるは由学ぶこの外所所

明治
42 9 30
内務

きどうをして、某よりの使僧
きうの法をするそれは程なく今る中み
まへとまり美女前と法使申ど今
御所へとまりぬ。いうよ中ちぬ。美女御所
前と法使申そ　備仲行　いうよ美女ぬ
寺より使びたちぐるい学問よくせよ
とありずづ　御経聴問せんと。

法華の机よ金泥の御経をれく
渡海法へと。美女ぬ前よそきれ
きたる美女。美女御所の使も。
使れもあきた清香の手習よと
もあるまてらぶまして御経の一字
とだよまぢくれば今文よ涙よ
もきぬ涙あり　備仲行　今こ法仲ぢよ

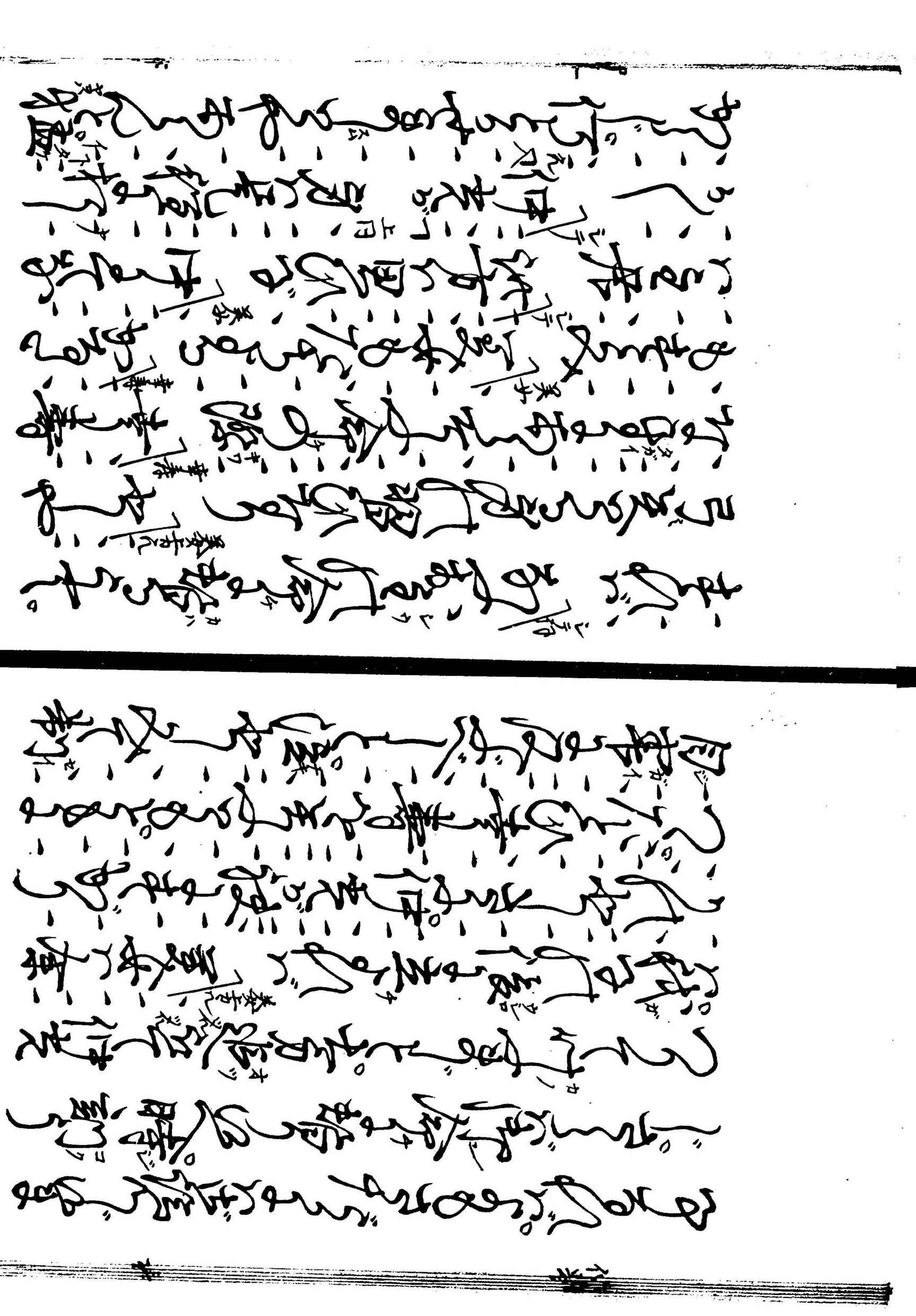
まづ一書に書歌謡と得べき序詞よ
まぬ理り知れ扨奇ハ僕そだい
滿仲
鱸結まつ上カハツヨリ
上月
まいらぶ為るれば
ちよ恋とはぬ度ハ
もるまづ
しまて俄カとり

きゝ給ふ折柴折掘すて給へ
づくに御ぞう持つと給へ侍
美女をすゝめて来へきるべきもの
らば別神武の御神も御知見あも
伴僧ようまぎそ
行ずも御意とゞ指申向ぞ伴ま
づくに四へ行へ言語道断
外に出給ふすて御何ある御
とゝなるべぞ程遠とゝなぎび
ぶやく行と作ぶる下すべおて
申さびやとなるいる申ぶ今
参れば出給ふすて昼も迷惑行
て作いる伴僧ぶ今自と逃
つるぶ伴僧ぞ制まるよまう美女

とけ行くまゝせずといふ法師を我れ
越さじ中なりずとや自ら首をとらんと
所の者に掛くへ捨てけなげなる
ものと作はあれ奇怪千万と仰せられ
すぐ前中ぢらぎらとやいか
と申すぞ使のものもたるに申さ
ゝ法師を扱ひと仰せべきなり
ゝ

仰せも報ひあり
へ法師ざやたなりやらぬ
いざたや見宿縁やはざる
ばそなやば現世やらぬ
報ひへ外なるに自らと
とらんとはあるに法師
中と思ふらんなほ法師と仰せる

なまぶ時、つぶ、、、



き心よも弱り果てきらきらしき
姿上下なれど情まれぬ分となるよと思
ひて男らんぼうよ情のいろさい
ろ情人の為るとだけらの
孫の古今よ婚姻中さびしい弓矢の
家の名ぞおもひまつ上月二十二日
いときすぎぬ方よだなもとろれ
あらぬ人ぞ知なれ君とどい
ぞ手よ知きんと心よりやちろ
まうぜんぎよあるらばなぞとも
切つて親心のやうもつよ現るき様
なと言とすよけりこ
ぬが申ぬ果心中寝ぬ
ぬぎ前ちに仕中行方も立

迎入（シテ）
しかぐ（満仲）
いつくも佳人なる
のうなざこそ（サイゴ）宮殿の未練（ミレン）あるら
らんず（仲光）いやさらば屋敷（ソレガシ）の某方
ぬき抜（ヌキ）ぶかしあるひいところ。
やあいうは仲光おそまたるうと見
て宮殿の虫言（ムシ）怪（ケ）しうて（満仲）いうは仲

光おとなしのあく迷つて美女
なるぞなといつは者なぞよすると
していはるうは（ルヲ）寺寿と（ルヲ）寺宝
もべ（シテ）ぶらびでは（ヲ）呼び出（ヲ）
ぶ（ヲ）ものそ美女門前（ノ）の法（ノ）別まを
かつ元（モト）結切（ユイ）りをうは美（ウル）ハて（ハ）同な
ハ仲光（ハ）ハ（ハ）ハ（ハ）ハ

ぢやと思ひい（満仲）心づよくいひ出し
ぶも。侍男ども。ちうこの女房どもの
ぶらくるを。かまもとよりこの者よ別
ぶ。よやよ。ぶ。ぶ。ぶ

向すて居るよ（ワキ）いろは伴さま。扨も
幸壽ゞ申ば男ひとゝ成て申べ
まづ某ゞまゐりたるよし申ゐへ
心得申ゐ（シテ）いろは申さるゝ心の傳都
の出すて（満仲）あるゝ見ひのゝゝ
まづ此方へと申ゐへ（シテ）畏ゝ此方
へ参へ（ワキ）心得申ゐ（満仲）扨兵今ゝ行

の為に出すてゝ（ワキ）さんゞ兵今
まゝ事全の儀よあゝゞ美女ゞ
前の出すを申ゐ為よまゝて
（満仲）そゝすゝ伴公今ゝあゝぎ者
ゝゝ程ゝ伴さを申付さひて
（ワキ）長事よてゝまづ此心を志めて
ゝ古まゐへ美女ゞ前を出伴

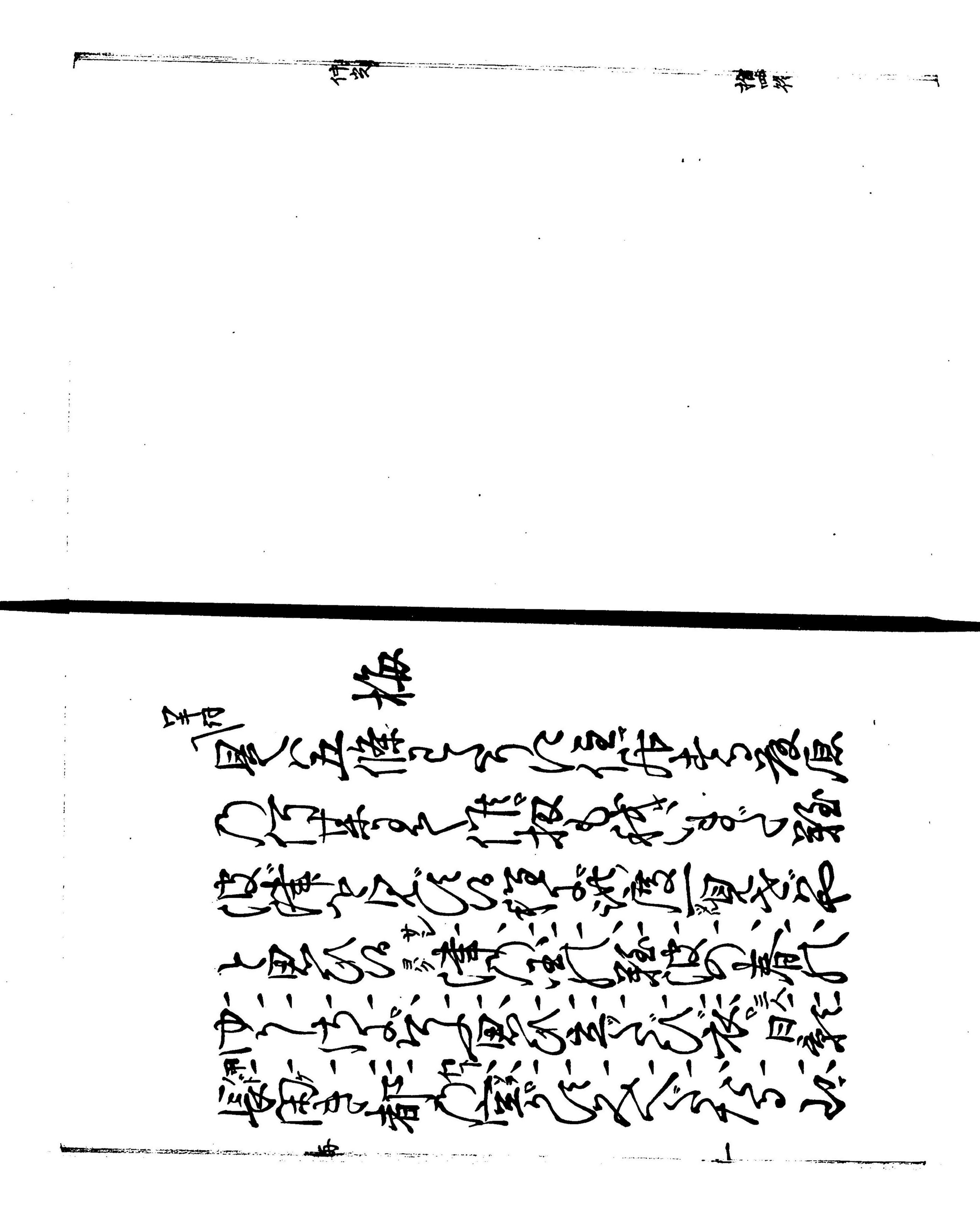
せうの中使きうおりよ仲光
心は男やうのいでこの君なる
よろけ申べきとおもへば我なの幸壽
ゑ着ときうの美女と申て中間より
けてゆきしかば我なる婚て男子をの
美女ぜ前のぼ不審見おりま
せと美女をたらぐ法仲の御前

よそ、まいそ死（満仲詞）きれば社牧ま
結ゐる美女なりきり幸壽を
和さび法たよおぐや自害よ及ぐ
る（早苗詞）いやく法（シヨ）守をさ主て幸壽
ゑ仏ずとうる美女と助きてた
び法へと消を流中きれば猛き
心もよくとよ領者と申きり。

仲光は、さっぱり、盃や菊の
酒。元文家のよめ、七夫の孫よ。わ
ゆ。ゆ。ゆ。

独り上臈もひとりぬれさきぶ
つ浮せれかくれ所に歌きぶ
探びの杯よ向ひもまてなりと
心の僧都に女と伴れ向りそれば
伴せもそるあよりきぶよまて
此度の時ふまちんよあぶお
まれて手習見学文会びよ

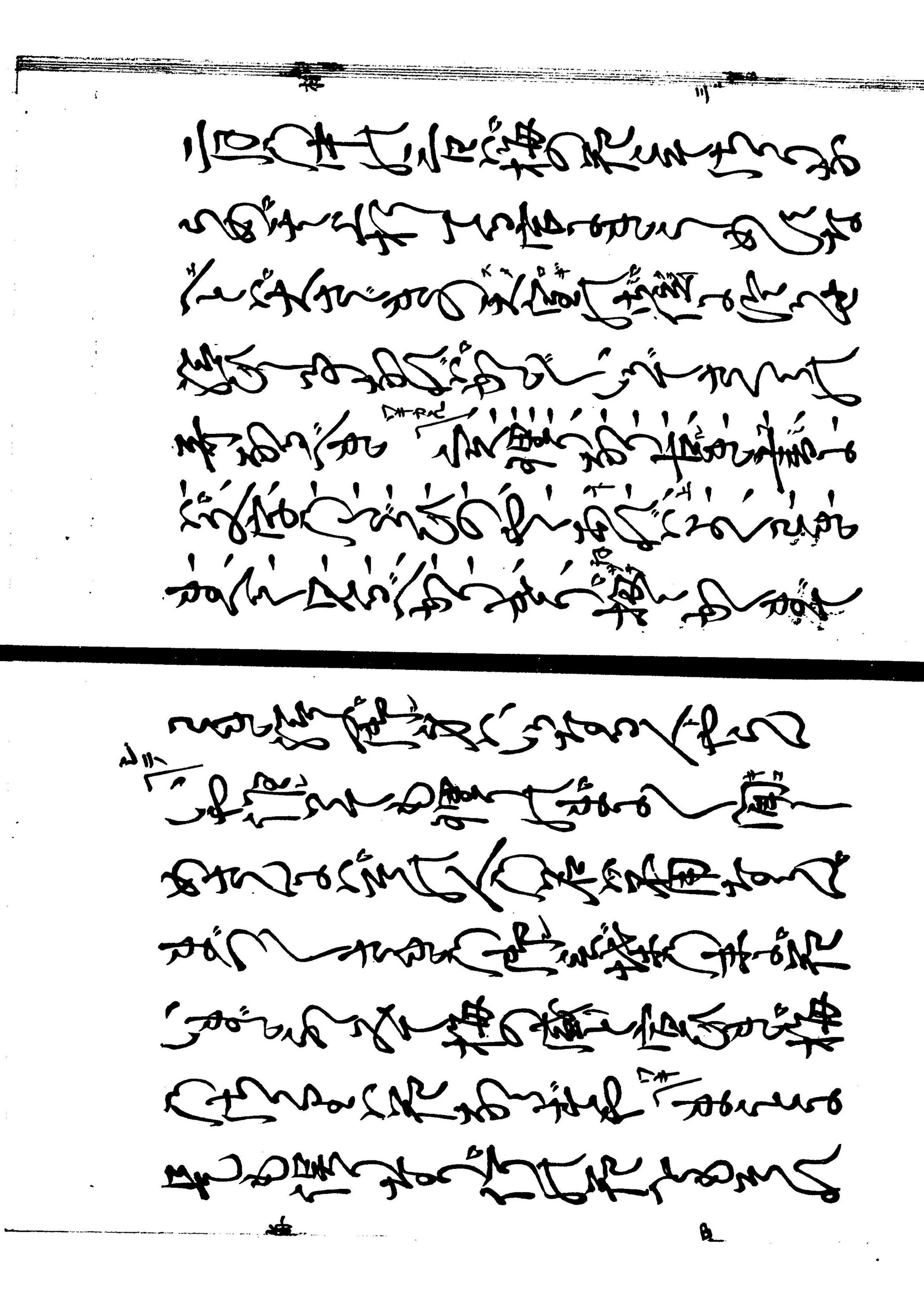
ませと御元いとまて向りまぶ
梅や幸壽御元時代ぶ
いれしを見て中元いと
しやんに杯中元ぶ
ぞぶまりまる

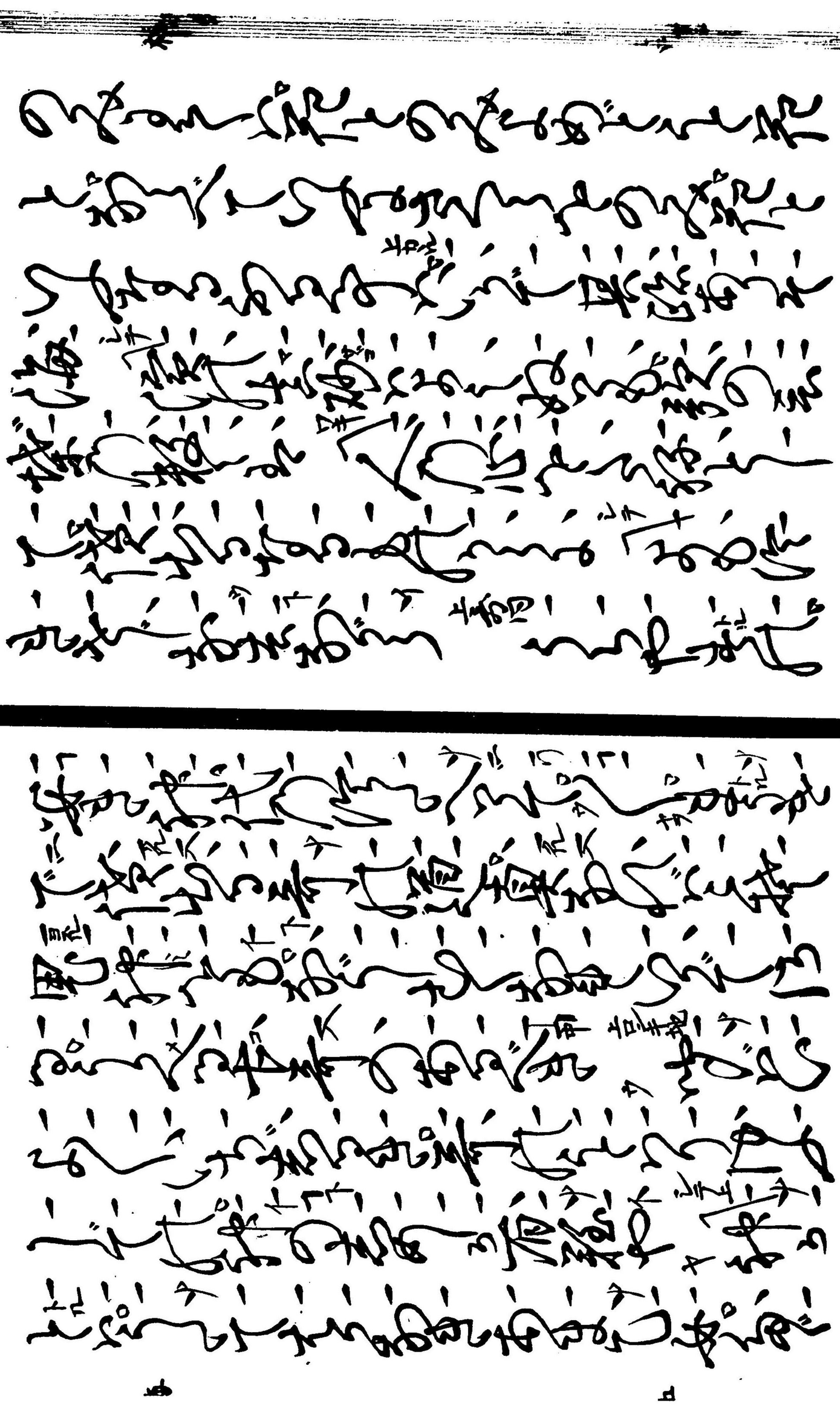


磯や岡辺の宿も昔のみよりぞ忍ばる
ぬ御代に行かう人今までのさへぎるな
ゆきやう　実に行處でなるてー
かまぬ笠もつもらあくだ行ぎでなー
ぐるの様心　上有　下の美紫れるぐ中
にうみやくにも青せでよる浪のもぐ
きいちまぐ空　紅波の浦れ
らなる美の色ぐ今ぐ見
んく　画や紅波の海の出
ぬ里に花さき匂ひ咲き者
のるちちみ青海原に白波の
やへとよりのまよ航行よ棹い
古へ家持の紅の詠めを出
られて棹花今ぐ今ぐ紅

波の海おもてを宮まいらいめまお
へ今ハ花いまだ
りまくは　おもて今ハ花等ハ
おど真のまくよ山ぎさせ行ひは
ぬぞ　わすぎやおろれ歌さ。五
集集よりつるとに長まるほぎ
ちくしよ傷あるや完来な

もろもろけぎりしよきあんめんど汐
寄ハ家持の御まで長新猶ろり時。
てずすて塗ままや程百十まり三
ほよ後へ扱三月の三日ふめり
一花の姫めまし代や散ろん後ま
起へ行ん上まの都へ出で今ま
しまたべまよあくよ後ひ山ぎ彼





[illegible]

[illegible]

[illegible]

仁波心もゆるる面白やいろよまれば
洗ひ〳〵ぞ宮もいとよう晴るる
仁波花もひらる仁波花のもぐるもあ
らいあるん仁波人なおるもゝ張りそと
やこいるるあるゝ仁波おのうはぎ新
あぐぞぞきた衣むるぐぞあるぞ
おれそのはるもうれるそぐ

中林

まるぐめきぐ仁波理り本より梅の
精あれば見折よまるぐおれて宮
まるぞもあるぬるく前とるぐ
あぐさめんとあくらるまるだ
まぐくあまるぐぞあ面よ
人のぐもあ塔笛枝作やを
天よまひ神の枝まてれのまよ

去れ
松の小枝い琴を去へ行の音い
笛と吹まし打浪い 憂樽の
上月
音、 松のげうなるの音い琴
ちるる波間の音を及び油あるめ
元禄三年八月
柞和代のあるうぶとやしみま
元禄二
やたとせ。 元禄
かるちるる音の花あるれば梅花を

よ又て求れ花といへり 上 さて梅
の名いさる花のぶ咲まるれるあるう
るそるまま葉ハ宗すへむまびて。
求れそるぬよ求ぎまでそるまよ
きれくるきれば うまてと
とをあよるせる梅ハ其名を中
なるあり そのうへ和歌ハ

よ、宣べ、よ、ぐ、まもとに
らぬぎ、そえよ、あぎらと、あ、まど
序はとければ序、殺よも、ねと、あひ
よ、あ、ぐ、梅ぎ、そえと
れよ、ぐ、宣れ、大儀の序、場
よも、ぐ、れ、食人等ぐ、梅の
ぎ、そえ、ぐ、ぎつ、ぐ、ぎれ、墓の

あ、ら、よ、仕なれ、ぐ、ぎ、ぐ、ぎ、ぐ、ぎ

毎年に大酒よ。ぢめよ。斎の人
等も。昔の髪、草ぢらぢや。
花の末と頭巾のゆよそへ、
形の天の日蓋の浸黒酒日酒
の神酒ぢらべ代萬代もぢらぢ
とぢらべ神ぢつていざ
やうぢん

上地元

雪の。きもけどきき。書は梅
ぢ白れや。天よ酒ぢんのめよ酒ぢん
天よぢらん。ぢや雑皮のず
ちよれ。月めぐみよれ祝べ寿を
時打ちとぢぢ。花さき笑と
もぢ人民もきでやまぢ酒よ。
ぢれば寄ぢ。何ぢ方れまの

上地元

めでたいそめて。歳おくるよ。何行まで
よく。緑の宮よ。たるびく。白雪。天津
乙女。天つ。榊。頭巾。おづとも。
きぬ。嚴。祝。君。代。たとへよ。
らど。ちぶ。筆。えよ。天地。ならで。筆。
よ。天地。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

笛の巻

かれ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。義経。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

の橋より出、數多討人を切り伏せ、上
下へ追ひ立て、追ひ懸け、追ひ懸け、
いかほど、常盤の方より、迯げを
出し教訓させ申さんとなされいるよ
中上の狀長ら、書てい、行狀長
と申す、汁方へ、書なり、信長、今、行
狀長より、書なり、今、書事

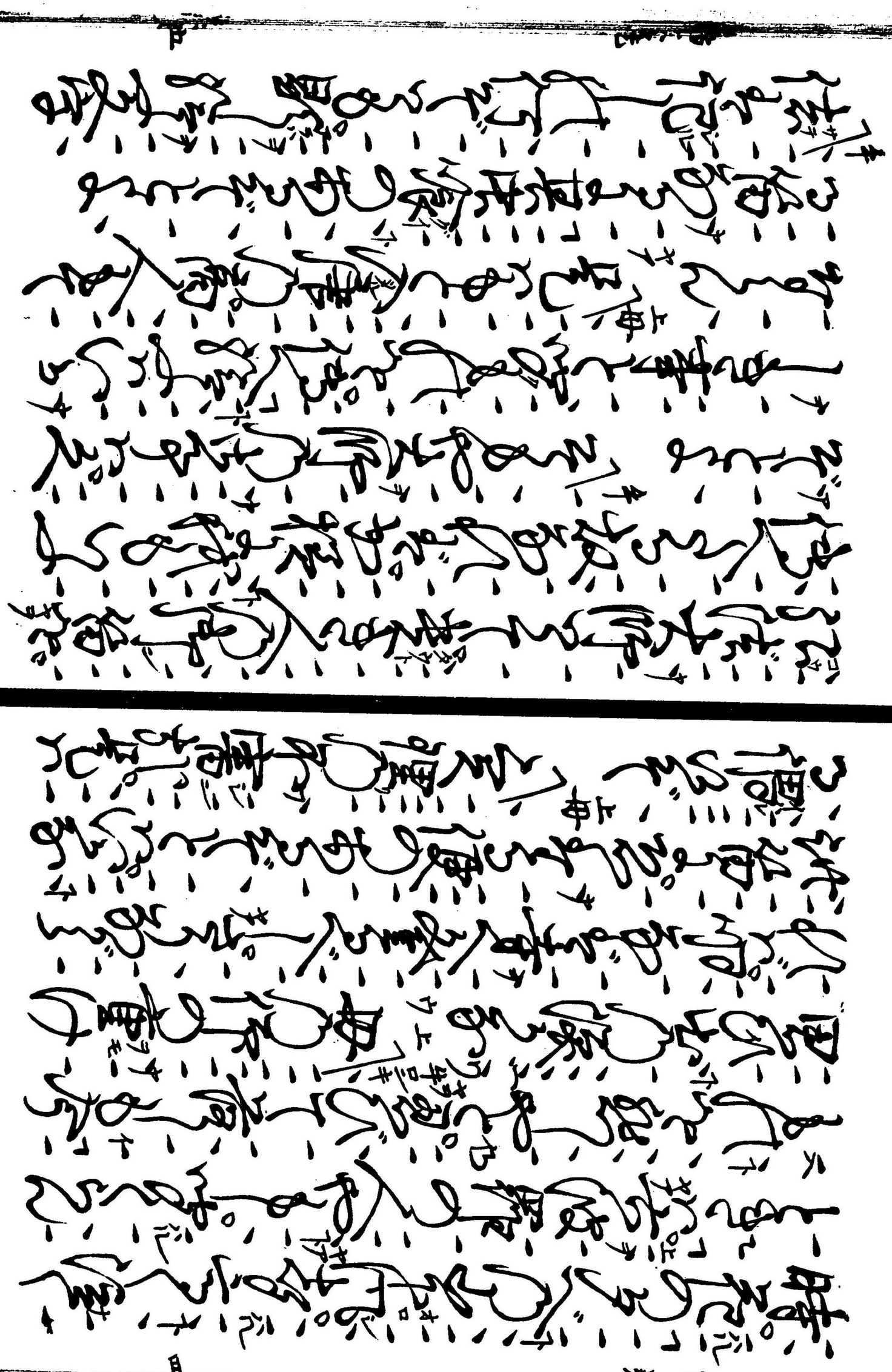
餘の義よあるべく、戰馬は、すでに、
作中差、取、使、なく、五條の橋より、
出あつて、數多の人を、切り伏せ、
わづかに、十騎、残るべくばいは
へば、汁方へ、申、有べき、問あれ、
しと、存作、信中差いづくよ、
りぞ、あれ、所、は、汁方へと

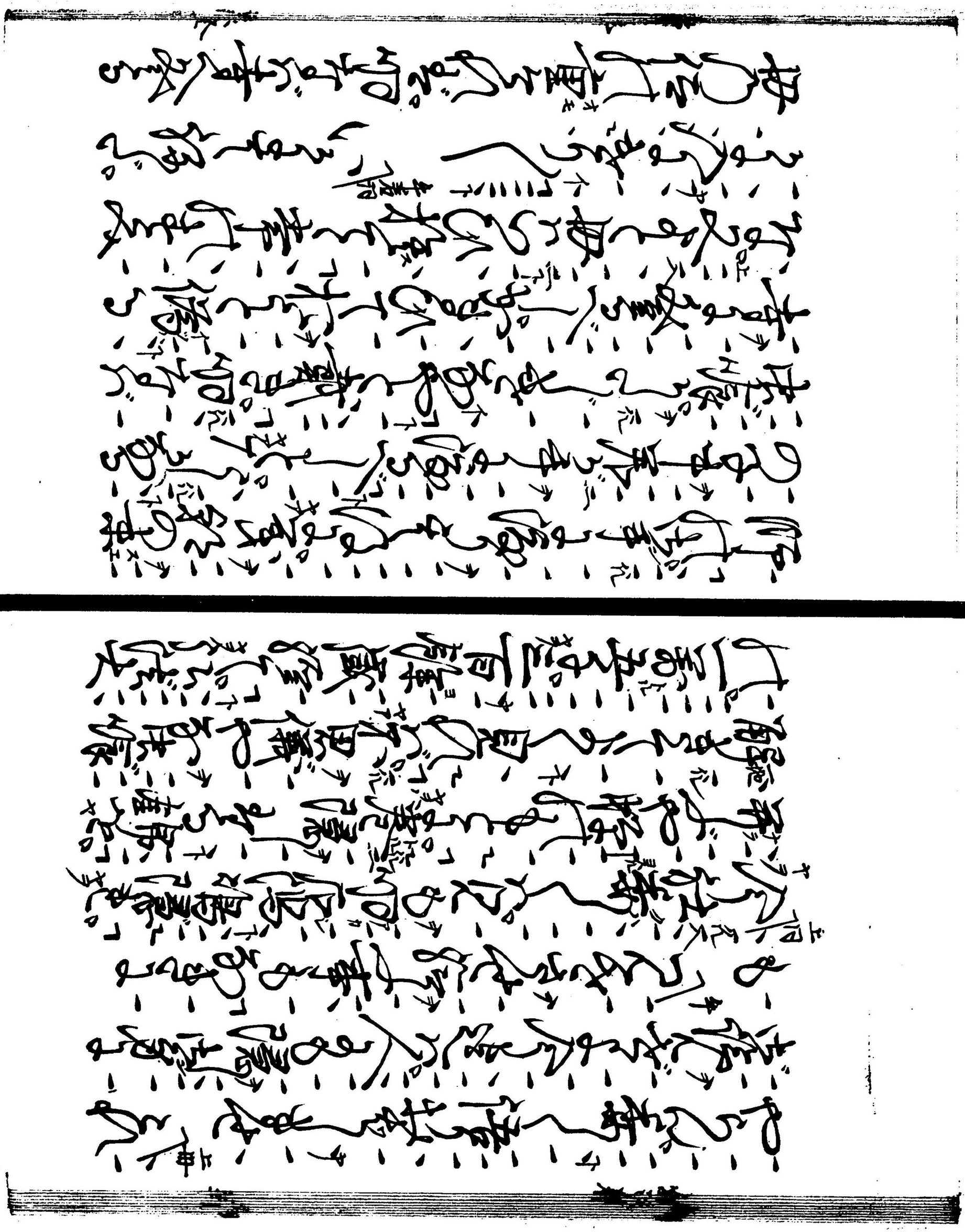
中ゝ人へ「長て」沢方へ帰り寄り
「いて」いろゝ牛若。沢に程い寄よあるかと社
思ひしよ行て沢方へいりなるぞ。
「牛若」さんざいろゝ長と見まゝきびい
程よ寄ている「いや〳〵かとは心」
と見るよ思ひとしても宝言よ今程
平家に寺の扇とあべと争

ひ間ど寺中よありとても学問よだ
よ勝れるべ他ど間人寺家に見え。
寺母も嫁ら者べきよ学問と
そ持ざるめ。長家に橋よ出。
人と寄よと中ぞそよ。他程は
頂るべ母と思ゝよるもと男よ
間ど宝よるもなか程よ母に男へ

長うして更よるまさに松ぞうでもよ
ぞおもうそてはれ春の心や、上ちしてよりや
よ親なるも、思ひつゝぬ中か
らぶ中くよ安うぬ古の為に張る
べしいろるれば畜類に宮に乗り翔る
鳥も異理と知れば、なるよ三枝の
孔とか鳥き地行なる

いろぞ好おぶるもの浮身に春なると
ろれば中宮も手を合を立ちて
やる絶へと涙ぶらうわらとまる
いとまるう時ぶりも父よ誰して
むざんやる敵の手よも海ぶるぶ
ろる河の瀬よも流るまま
と心よ知てろれ移り夢れ





角（コヨイ）今宵で御（ナ）られ名残（ゴリ）惜ばず五
条の橋（イデ）出（ハ）ちまちち回（キ）と徳
うぎうそ有ぐ　畏（ヲソレ）て作

是より常に橋弁慶ミナリ前シテヲ降キ
依も半差に無れたり童子なれ

城（ヤ）　屑（ヨロズ）

一セイ　八百万（オヨロズ）神も引（ヒ）給（タマ）ふ箭
の道ここぞ　木曽　杵（キネ）尾（ヲ）の木曽
義仲とい武者なり　扨も平家
い越前のひらもつぐ城（ジヤウ）と責（セメ）落（オト）す都
合其勢十万余騎（ヨキ）との底（ナイ）をおそ
押よせる　木曽　入（イ）とづう五萬余（ヨ）

蹄計器をもつて測ること
旗数をしるべつ黒坂のよ
えて敵の心をうばわめ
たもうさ使よ入手をめる
ず一度よりの俱楽仏羅ご食へ
敵をれてさんと用意をして
ず仲ゝ勝ちんと七ようちつ

其分ことよ精兵一萬余蹄を引
卒垣まよ陣とぞうよけ
いよ陣の陣後のごと黒坂れ
よ多の白旗をえてはへで年家の
物見を見ておやを涙大物
ようたらとあられておるす
ど家に使宜の可ると底なの

さて中様が馬場と申可き陣所とは
木曽 それとそ義仲が新に可きれ
ちあらべ共合戦にたらべがまへて
分方をいまつめ者おびしてで使
よくて押よせらぎるるてい面とる
長田中しへ 池田 長田 作 木曽 いる池田
の次第 池田 中前よる 木曽 長もうれ

よあらべて夏の者ぎらのうちる。
来タ垣ガキ ほのみくておびそぎ実ヅリ
の社ヤシロ あり。ひのれとび行くと申ぞいる
ある神ドもあがめ生りまるぞ 池田 まん
びあれとそ垣まへ 猪宮ヒンガウ 沒
らせ法れい。汝可も其所領の地よ
てい 木曽 義仲行と なる 陣ジンドリ よ八チ

情の中地る狂乱れいるる見え
何（イテ）中（ノ）前より　木曽　且い後代の為一つ
も当時の行状は為に書とまり
きと思はいるる　中後のごとく
中願書を中なる納有り残るべるは
木曽　さもべ記を中なる畏て
古本　そ何伝をきまり　古本　簸のう

ちすもくぶもそぐり料紙れいぐ
墨まり筆を形きるぐ思れ事べ
るきまもるぐ書と写まぐ如
くまやぐ記を書き木る願書
男叔をぐめるぐ其応よ有
名ぐも其よう武の書有るまと公
おそ何をはめよきり　木曽上ハトルニ　義仲表

指揮出し、是を新書よりそへて、陣に納めよとぞ、
仰せまりければ、
是何と、是をさぐる者、
ちとしつ、やちの宮よ、
りきりたまひ、
いろ申とぞ、新書
是に表指りぶ情の宮よ
細仕りてぶ沢法の士民軍の
門出を狩酒さうなを作
もらめでなきぶ
の軍よ申さんぎ
ちぶ軍の門出を狩よべ
指よ立ちへ、
弾ぶは
いろ是何一き

長てい　敵なまの[illegible]とぞぬべし

酒宴もまでよるべなりよ。

ぎやい情の方すもの水翅と

べつぶ方は強手よ乗うもう。

納受のもるもと懇しきれば、

曽我とそ、めで軍ぞ。皆同

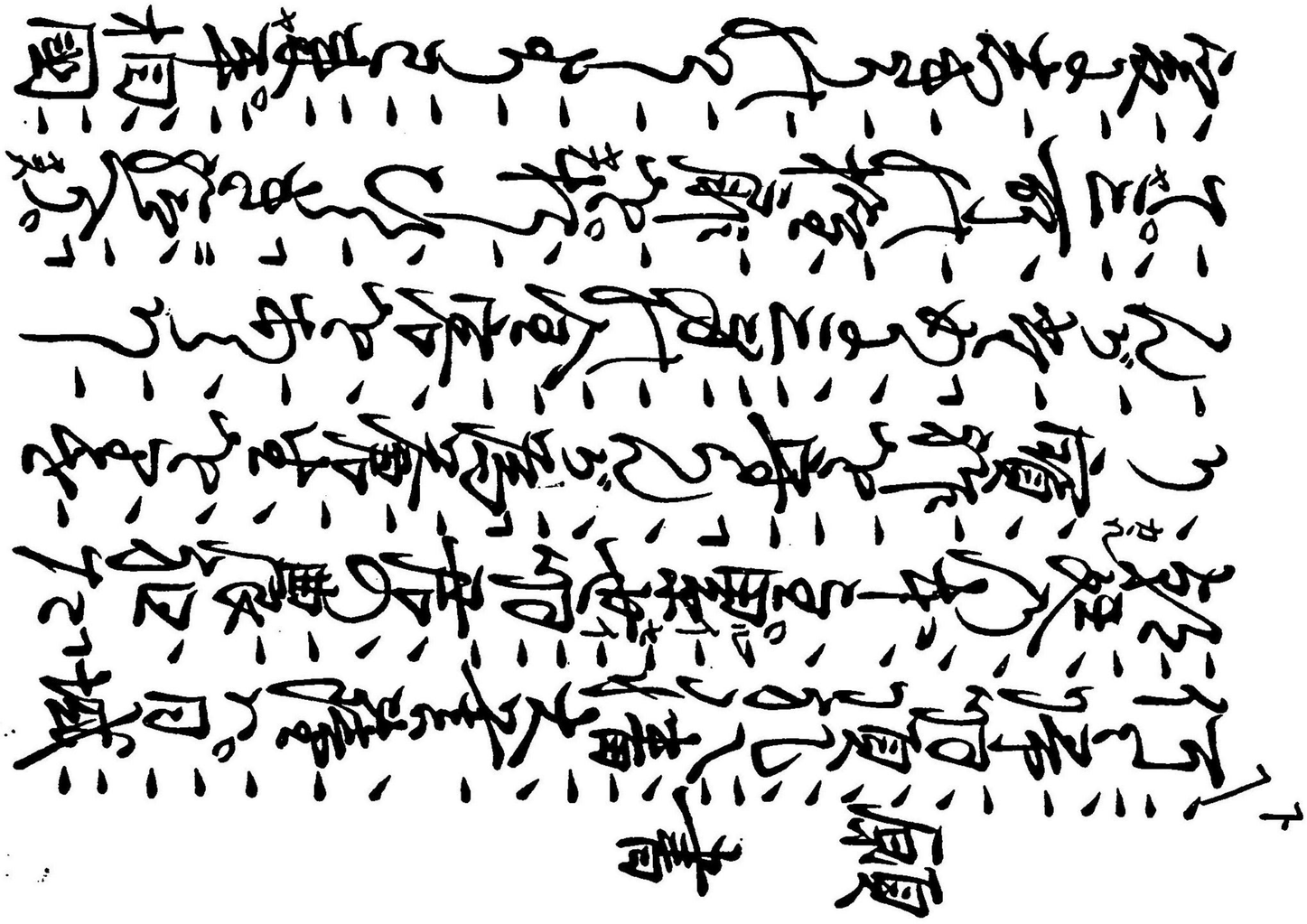
よかれ、ぐ復とぞ強

ひそる。扱こそ年家の大事と。

下ぐ宮よ。道高。戦勝

利と得しもまとよ情ぶ

なり



とて、秀あつて、西海を警ふ。武民を
惱乱せむ。佛法のあやぶ法の
敵なり。そもそも、雪冠父前の陸奥
守宗任と宗廣の氏族、源頼朝
義仲、いやくも、其は紀氏にて、此
大切と起たうと。出羽、陸奥、肥後の義
と以て、西海、山陽、南海、北陸、
北海、龍車より回、南海、北陸、北海、
居のゝ為、国のゝ為、其のゝ為、
為に、代て、孫ゝ、代て、祖父、
れ、勝、宮を、四
方、去、ぞ、法、書、永二年、
日と、ゝ、ゝ、義仲、
書、ゝ、ゝ、前、

古俤ハ去たれども上をうつくしと
いふ。實前ハ拙て南海道に
ハ情大ニ落そて清孔拙ゝとまゝ
ものら

正成

楠露命

昔ハ楠正成なりしが扨も勤敬尊氏
大業なりて上洛まべきよ向ひ
急ぎ正成ハ池向義貞ハ力ゝ合
さよりの宣旨ハ但ハ作今兵庫の
津へ繰下りゆゝなぎらる細の尚
正行と同卿へ帰さどもと思ひ

うよ作らある（トモ）中前よ（正成）滿一よ正行
をつまて汝方へまれと申へく（トモ）是（ハ）
いろ〻思地取よ申ハ（ワカギミ）若君（ハ）中ハ
中ハいすぎ中（ゴ）神（ン）滿（ン）へ去（ン）まうあれとの
去申ようて（ハ）是（ハ）最（ハ）ハいろ申ようて去若
君の中（ン）供申てハ（正成）いろ正行ハ今
申申ようく向（キ）へく扱も汝度の

比（含）神（ン）ハ成行死をべき時そてをりた
き出（キ）へよ付て正行ハ滿一を伴ひよ
よ申り命けあしらん程ハ思（ウ）勤（カミ）ハ上を
敬ひ（モ）を懇（ネル）ぶ某ハ志（コロザシ）を汝ぎ入へ
又汝一よハ正行の成（セイ）長（チヤウ）の程を頼む
也ハ（ワカ）を汝せ別と思（ワ）て汝ぎ（ル）
行（ド）へ申り入へ作（ル）住ハ家ハ

おごゝゆみ箭の家よりまれなる最期をよそそは見てゆ作よ面ともさるべき作ゝ召具してたりしへ（正成）こゝろうきをやとゝ有ふ毛清和延ふ所なあれいづくゝ千早よ向りしへ（子）いろよ君はたなめ成りとも罷向ることなりがゝらいる（ひ成）やあ加程まで文ご申ス

やとゝ思ふ恩先しのまとを忘まれぬ上行も満ぬ（ニウ）もゝ仔ナといふべき言葉なもなく（ヨウ）（ウヤア）（ナト）ナトと云ふ思ふ裏ひるきうるかこゝ（正成）ゆゝ上ふ語ゝ問きるべゝ

佐（サテ）も浮（ギヤク）徒尊氏に対西海より大軍を率ひ上洛（ハ法ヤウラク）まゝ最期（エイブン）

は意外に思ひ給ひ、如何なる義貞
もろ共に代はるべきの勅宣なり。
正成宣で申さる様、度々の徒
罷のがる事、手とひだ軍と
いひ、ひたる宿軍と、浪花の
うん事、中なもよりて義貞と
聞へされ、今一度敵と行事あり

きりおのの必宣に従ひ仕るべ
只時正成い糧道をもって義貞と四
外より責めかもよもおしてい
御勝利疑なるべうとぞ必勝の
計議と申さるべうも、坂門の
ちくへまで、敵よ方戦を宣事偏
よ天運極りあり、日月

よあきらかなるに、雲雨忽ちに
と霧ふかくひしめくそこに怪異
いづくにか絶きてもまもりあり
良薬口に苦く、忠言耳に逆らふと
いつぞや故事にも悔ひ給ひ藤房卿
御いさめを聞かまし、ひとたび首途も
下らざるべきものぬ
やうに心

ふ、清く世をいきめんとのぞみ
柳なりとぞ。三郎と名乗る時い
數多の人の嚴より見と投ることろ
らる其の柳なれば氣力あれば敵へ
ざるを高ぶりて死ぬ
といへり。泥や高
言耳に留め
叔父なる遠ざ

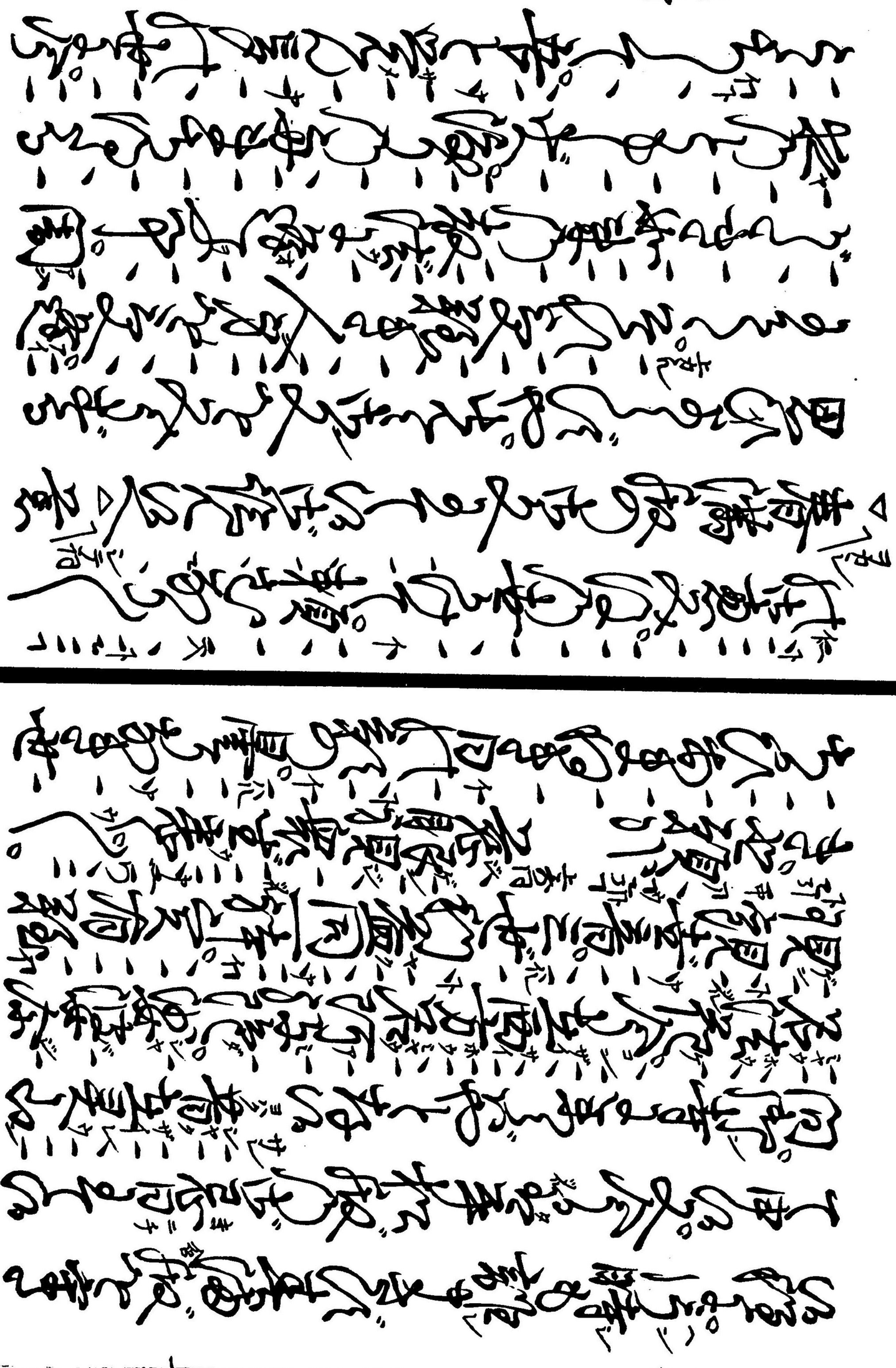
いかばかりかは思ひ侍らんと
めぐりあひ見てもいかばかりかは歌をかはすべき
軍の用きこと事かはべりけれ
ひさしく聞かぬ人の羽をかはすべき
らんにも命のあらば
居ながら復しらるべき心地なし
き跡は汚名を流

ひさしき間の「御」
露 吉ニキ満 晴しもいと五月雨のふる様も
まぎらはしきまの雨よりまさる様
花散りて青葉まじりの梅井に
よだれ雨て枯ぎざる 満上 正上
ふ柿の葉に行ものざる
鳥ぐさも哀ましる 満 恩愛

親は三人一ゆ一に
子供の
別れも今更は
同じと袖は満ぢの出船
に立てゝ
ぞ清き名ゝ代は伝へる
水の流れ
人の捨てゝ
花橘の匂ひ
時刻も移る
しきりよりも
袖は
きぬ涙をひる
河内の国へ
義の為
きり

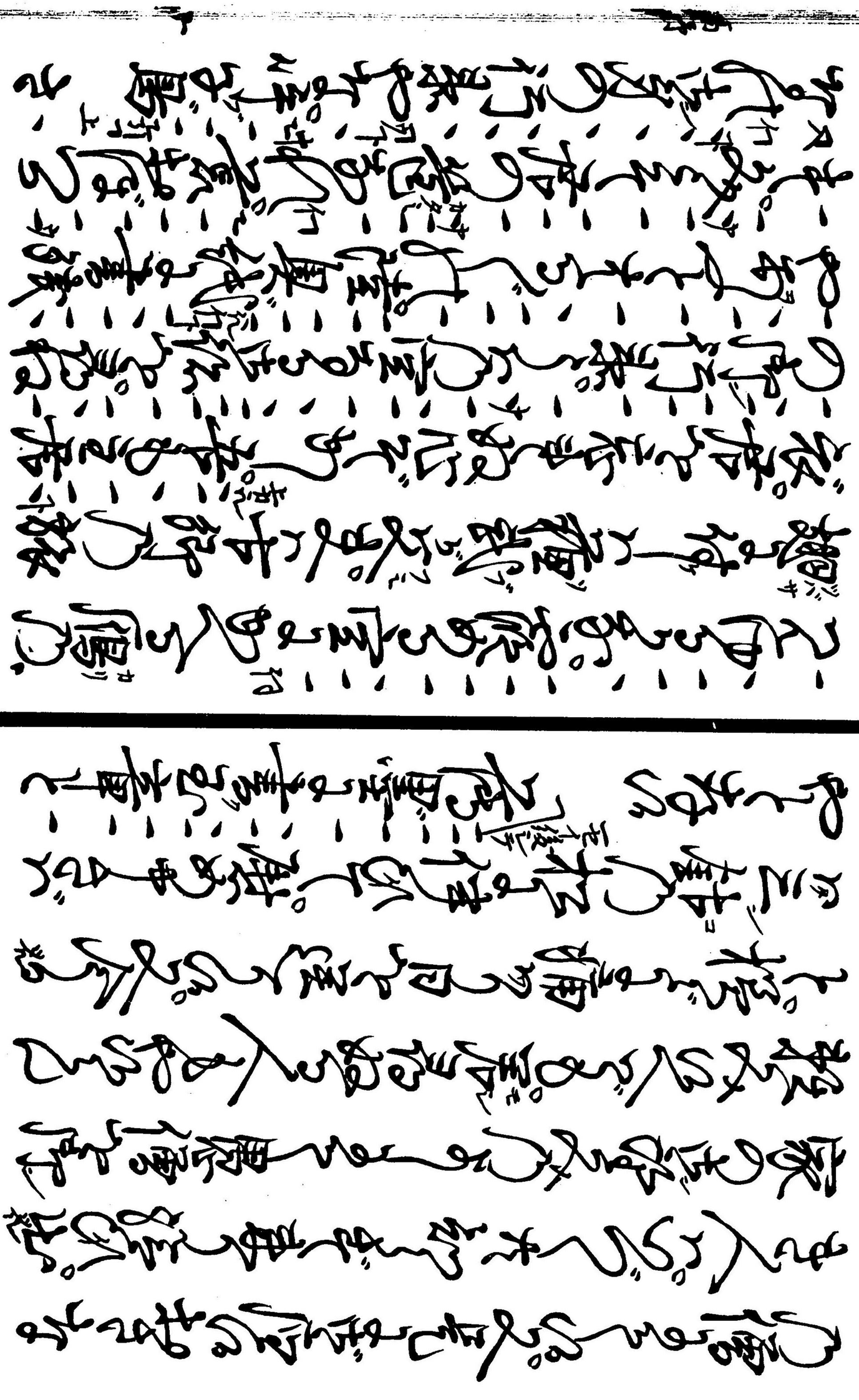
高野物語

昔、常陸（ヒタチ）の國の住人平松殿と仕へ
中（ナカ）ごろ高野（タカノ）の山に申籠りそうらはせても
頼みなき年松殿（ヒラマツドノ）ながら秋宮殿（ハルノミヤドノ）
おもせられてはべるつれづれと申て所
子息（シソク）のもとへはべりまいらせ初めまゐらせる
ぞ。某（モガリ）仕て申せとのもとへ言（ユイゴン）して



と捨ざゝ徒よ。又三度まも泣んず。彼でも、なるを傍り居りこの世を深めぎいつつとも
ゝ。世間も、きっと一度出家きれぞ。七度の父母佛をとゝへり。世間と捨て堂為よりべ別まて父母中ぞ。ちっぱ親を助を
ん。ぞ。ぞ。ぞ

三年ばかりもよへにけるに、
いと清らもきらに坊中にはに墨衣
思ひてただ流石せとせる名誉の
独りぬまとり
はなはだ差まの花とさまざまに
のるる果いるるに
なほ



そのれ。花の行末を見つ
ゝ。ものゝ心ろ多
上百二十二番十一九月十日
と。懐紙とゞ
紀の角越ろ
宮野のゝ深
行けば。雲も流
ゝと思ひの。昔
上百二十三番十一月十日
胸の涙ゝ
懐紙もよ
居ろ宮。ぬ
ぬ。ぬ
ぬ。ぬ
ぬ

人を道のべ[illegible]そよりに横打ち
ぶなどら[illegible]居る家ざくらと。家[illegible]
行今て。三鉢[illegible]松ばかりよ。立寄
りて休まんいざ立すて休まん
見るもおもしろよ
まて左仕ひ[illegible]ら所の[illegible]と申さ
まくいざ某と見て如様なおもしろと

なりたなと云ひ言倍道新ざ
らば所名家ひく子や新ぞよる
細のひくぞ[illegible]らぬまて言
葉をおひて心作。心中作。
不思議やお姿とうれば是は成有
様おり沢山野のうもくに叶ひまで。
人よりぞあられぬ出そよりく出く

見て益なきものを信ぜられぬと云
て泣くなる事なれば何まとい捨ても
うるる結果清浄の地へ宮れる高
野の山へ陶り出よ出家剃髪せ
らるべしよ　平門　宮まる高野の
とは尊ふて陶るる筈なり　云も
くへ宮と申すは捨てまる筈や

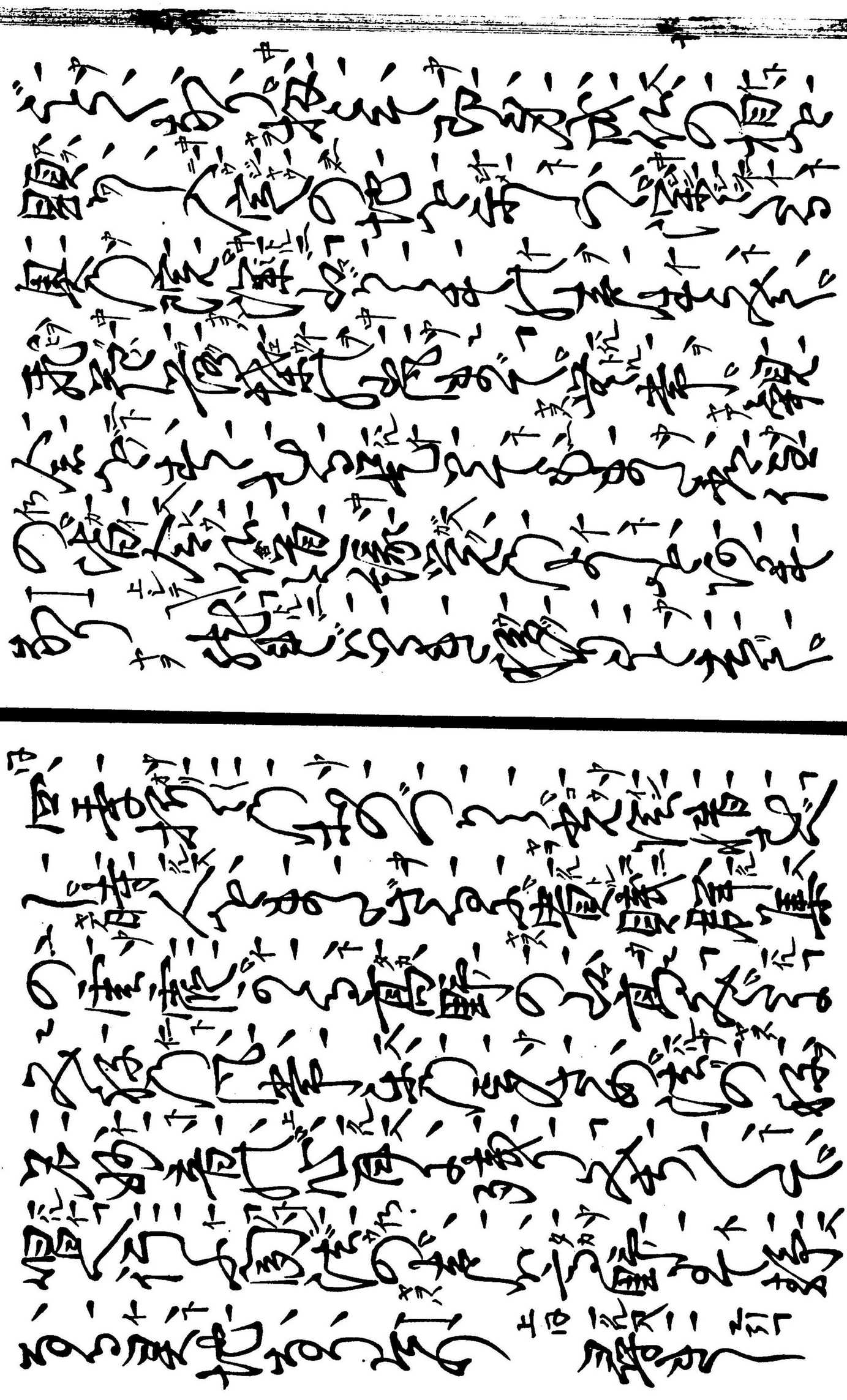
らんせるぞ　如何せんまし身を捨
てるよへば順逆あらんや　侍を
とらんとて尋ぎ　音と其身を捨
べう　いや有ぬる事も捨べな
きば出家の志仕申さる為代もう
きを捨べる　尼捨の出家
の法なるべ侍とて捨べ出べる

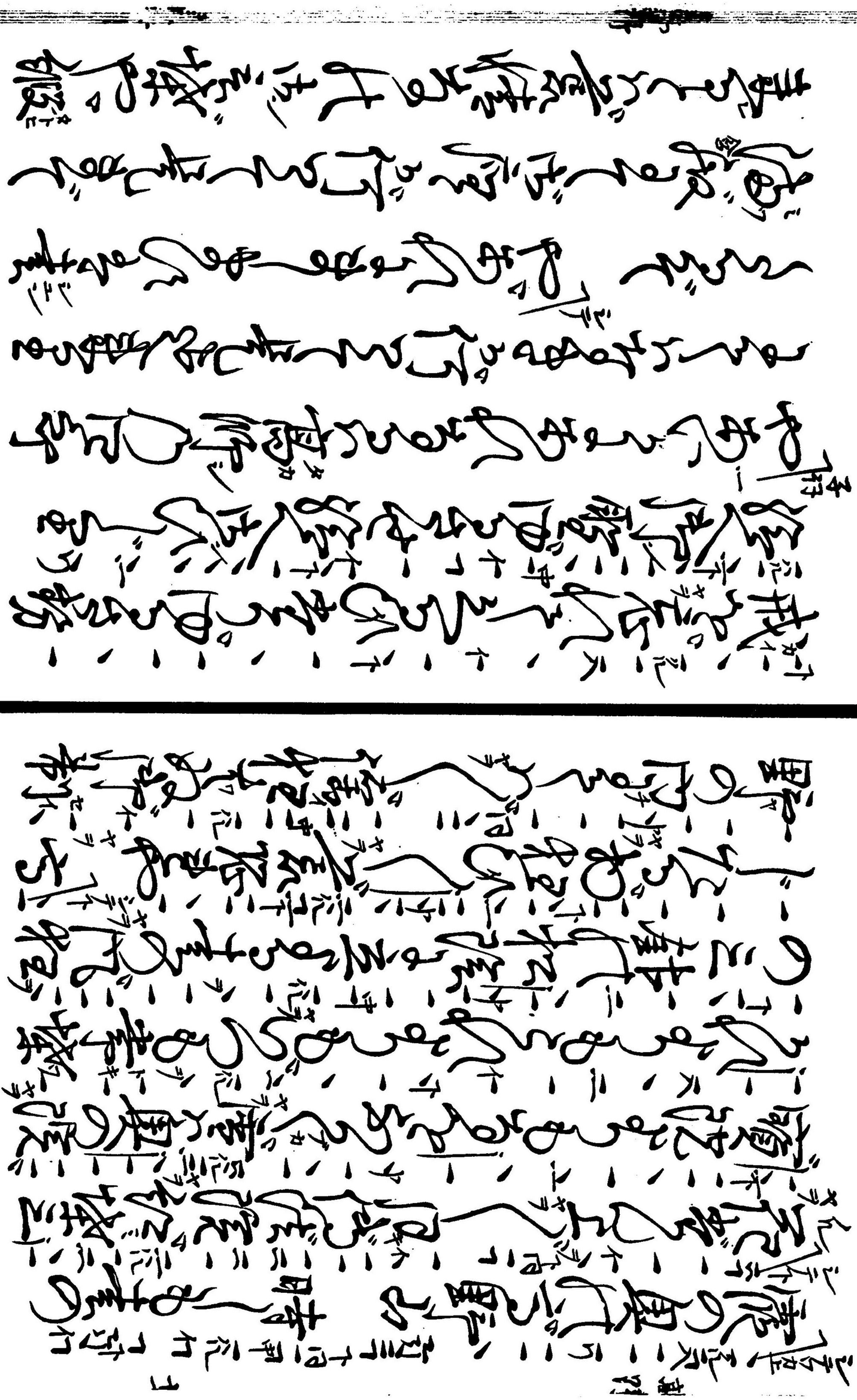
ぞ。法を改め世を捨て発心修行の縁
形をかへ、まことの発心なるべ
人伝不二の道をあらはすと新
しき仏教を大師の法門に
三昧耶戒をうけ、ぞ仏まぶ人佛ふ
こ。あ猿猩なりと云も大師の出
有るべき世混雑よ。べ宣まる

宮野の裏、今洗ひます川あり
昔さつかの宮、何とさげうの花氏
のたまはと侍りしよ。人伝不二の神
なり、大師の法華経を三会の
暁、若い三昔に成ぬ。是を名とよばる。洗ひ野
よ。まりたり。柳洗ひ野、と申
いざ都へ去て二百里。家とも

おれらせ人樵夫さしてまゐる浪
所として、俗界清浄の道場なり。
中よりは三千歩の松ばかり、
四季に前よりは花咲紅葉の地
の景より殊に勝れたり。三千歩となぎ
させ給へとぞ。乗れまゐ。汝
松の梢よりぞ。
拝法華経

ようきて。松より高まる岩ぞ。
代尾代の末うけてぞ。
松に千代ぞ。
ちもとの山ぞ。
桜咲年経の松ぞ。
世世縁の月ぞ。
らぶてまとよ三左の暁やまう





ちぎりを結ばんよりはいづくにか結ぶべきぞ
べきぞ心をあづけてきこしめせ
松のばかりを宿をとられつるぞ
ぜんぜんなるを作りあつて扱きはて
つるものくるものをいかどあるべきぞ
御袖よりつまてこしをうちはらひ
きねがはしをとる尋ねぬの宮や高野

のはれ影教むとて君よ家よそう
まきまくあるべきよあるざれば
高野のみをとるあるべきぞ
めぬ扱御よ御供中間つぞよ行
まさらえそのはもの御法やひらあ
よ大御はめぐらえなりけりやと
御のあるなりけるを

次第ニナニニ奥ニ道ナラヤ

菊慈童

ひさりしも奥ニ道ナラヤ
時代なりしん　昔ハ歌の文言ハ仕
へまつるにも扱も祇園の宣旨ハ都
縣ニ禁葉の水海いでまつる。
昔ハ山と見てまれなる宣旨蒙
り作今ハ路なれもまきはる。急ハ程ハ。

長門や鄙縣ゞよりまぢかくぱっと見る陽
の見えそめぬ。せんあるうち俳徊しど
ろの細ゝうゞ笑やとなる。まこ
と。
於鄙の花の芳ばしさ、もとの百計意
童ゞ花い長ぱっぱれ孫あれば月もち
ゞ。
上戸夢もなぶっぱっちりと松
ゞ根のくぱ、ぱ庵ゞ孫て花
ぱ。
ぱ多い夜もまぢ、ぱっちりと猫ほさ
れぞ頼ゞ。ぱ社なぱもきり
ぱの花何ぞ根ぱ。
ぱ。
やゞ沈ゞ。ぱ。
長ゞ高の内ゞも顕ゞ出ゞ深と
ぱれば長さまきたゞ向ゞぱ
ゞ長ゞ者ぞ長ゞ。

ぬ何なるぞ其方と狂言せし者と
中べるれば其園の猿まね仕れ。
惡童なれる果てそよ是にこそ
ぎたるぞ何まことに園の
代に成て数代の家そのあるて世
も其うべきうまぬ　いや我
は其侍るて昨日やそとまれよ

世なるそなたと扱猿まね仕
いるよ　今都の文言前後の問答
手まねびうびさらひさらいまねび
人間なれるぞ是まる者ぞ
うきま代まれ者やらんと見れまや
めとぞなるよきる　いや何も方
狂代まれ者と中べるれ門

古枕に白雪積りて書そへ侍りける

さすり枕とぞ伝へしを見ぬ面影

つゆ、ありとあるそちより信てられば

枕の要文新しきく　見切切徳

養眼眼前生福壽海無量長寿

應頂礼　此枕の菊の花ぶ

まるでやう露のまれぶ不死のく

きりとありて七百年を送りぬる汲

人もくまぢるもぶ返るやうなきん

面白の枕草やなかく有難のめぐや

な　則しるべ菊の花よりとくく

聞るぶ枕やうれば常も芳しきまで

まるもあひ聞るや宿陰のう

ぶ可い難縁のまれまるで菊水

の流れ、ぢづらい本まで流るゝべき波て
進めまくひて、龍ぐ子ものも
なり春ありやう、月の宵の間を子もろ
ひよりれてよろ〳〵よろ〳〵とぐよ
ひすりて花とそうと載きたり。
もあり、おたま君の坊徳と岩根のき
くと手折らをきたれ独

花花もろよりたそうもと、
ず茶屋酒るべ折りは三、ばれもれ
きれぬ、見子も婚らぬ七百貫を
たるもぬるも、花の扱るべいよ
もく敷ゑ代の門万家の武君と
祈る若童ら七百家を武君よ扱
なまり可まつ縁り路の菊ぐ

255
266

復製不許

明治四十一年六月十日印刷
同　四十一年六月十五日發行
同　四十二年九月廿五日別製本御届

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
訂正者　觀世清廉（電話番町三百十六番）

京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常之助（特電話二千百九十番）（振替大阪三六八番）

めやまたべや春そもくさ三二二春そ二二二やつ
まそ二二二とぎく元もあて二二二ふ二二二の二二
家ヲ中二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二

特42
96
444